

「ネット社会」どう生きる

あかの 順

昨夜、わが^{かかあどの}嬬殿が料理中に倒れた。その前に手の痺れを訴えていたので、循環器系の障害だと話したばかりだった。本人が普通でないと思ったらしく、居合わせた娘に病院に電話をさせたが、何しろ夜分の事でもあり、コンタクトも出来ない。そこで119番に電話を入れたらしく屈強の消防隊員が3人現れ、手早く手際よく血圧、脈拍などを計り、病人を運ぶためのコンパクトな道具で運び去った。その間、呑み続けていた私の方には目もくれず、声もかけなかった。こんな緊急時に老人ぼけの男性など役に立たない事を熟知している様子だった。それにしても救急隊員の見事な行動には目を見張るものがあり、感謝感激だった。このように緊急に倒れた病人を介護し、病院に運ぶシステムの確かさに驚かされたが、個人の悩みや助けを求める事に対する行政サイドの機能し得ないシステムは、どうなっているのだろう。

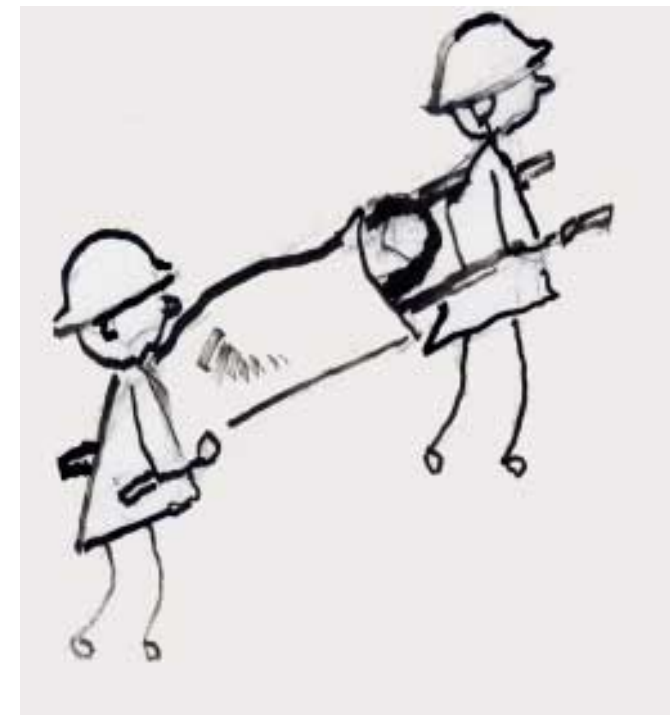
児童養護施設での暴力

最近、子供にかかわる思わぬ暴力事件というのが多く新聞種になる。何故、救済出

来なかったのか、気付いても手を出せない学校関係者や警察、大人達。何かが狂っているように思えてならない。

これから述べる事件はすでに新聞発表されたものだからご承知の方も多いと思うが、再度検討しても良いと思われるので記述する。

まずは千葉県船橋市の養護施設「恩寵園」の園児虐待事件。養護施設とは親の離婚や家庭内の虐待などの事情で児童を預かる施設だが、施設の主体は社会福祉法人や



都道府県で、全国に552カ所ある。「恩寵園」には幼児から高校生など53人(平成12年2月現在)が生活している。

この園の園長は殴る、蹴る、金属バットで殴る、ハサミで性器を傷つけるとか、3日間食事を与えないなど、かなり酷い虐待行為をしており、少年(17才)は、「園で教わったのは恐怖だけでした」と地獄の日々を振り返っているという。1996年には13人の園児が逃げ出して児童相談所に助けを求めたが、県は事情を聞くだけにとどめ、子供達を園に返している。

子供達は千葉県知事に対して「園長を辞めさせてくれ」と手紙を書いているが、何も解決しないまま4年が過ぎている。「一生懸命訴えても全然対応してくれなかった。その間にも多くの子が犠牲になった。無力感だけが残った」と、ある卒園生が語っている。

この事件はテレビで放送され、厚生省が調査を要請し、今年に入り事態が急変したという。世の中、肩書きに弱いというが、園長の名刺を持つ大人の言い分を信ずるのか、施設の園児達の訴えを認めるのかという、ほとんどが前者を取るはずで、第三者のテレビ局が取り上げぬ限り解決はしなかったように思われる。これでは子供達の人権は無視され、肩書きのある園長の言い分だけを通してしまう。この園における虐待が常識を逸したものであったために対応がなされたようだが、上位下達はあるが下からの声を受け止める機会は少ない。つまり、上下のコミュニケーションのシステムが働かず、一方向にのみしか機能しない仕組みになっているということだ。

中学での恐喝事件

次に、名古屋でおきた同級の中学生から恐喝され、5400万円を脅し取られた事件だ。恐喝した同級生3人は逮捕されたが、なぜここまで多くの人を知りながら、放置されてしまったのだろうか。納得が行かない事が多すぎる。金額の大小もあるのだろうか、2000円を脅し取られた際に、愛知県緑署に被害届けを出しているが、同署は事件を立件しないまま放置していた。被害にあった少年の家族が同署に2度に渡って電話をしているが、同署は「捜査をやっている」と答えるだけだった。中学の教師も同署を訪れているが、結果的に事件は放置されたままだった。この事件は5400万円という膨大な被害金額になるということが分かりテレビ局や新聞が大きく事件として取り上げたが、1万円以下の小額であったならば、はたしてマスコミは取り上げたのだろうか。緑署は「尽すべき捜査を行わず、長期間に渡って放置した。誠に申し訳ない」と謝罪している。ここにも民間サイドからの訴えに対し、迅速に処理すべき警察内部のシステムの不備があらさまに見えてくる。

母親を殺した兄弟

ついでに、もう一つの事件を紹介しよう。これは福岡県で起きた事件だが、大工だった父親が交通事故で入院、退院すると勤務先が倒産。日雇いで勤め始めるが仕事はあまりなかった。夫婦喧嘩が絶えず、昨

年春両親は離婚。中学2年と1年の兄弟と妹の3人の子供は母親が引き取った。その中学生2人は、酒浸りの母親に暴力をふるい死なせてしまった。母親は酒を飲んでいない時は優しい母親だったらしいが、子供とお酒をやめる約束をしても守れなかった。兄弟と母親の喧嘩も近所に聞こえるほど激しくなっていた。事件当日も家出をして児童相談所に保護されていた妹を、長男と母親が迎えに行く約束をしていたが、母親は「体がきつい」と途中で引き返してしまった。約束を破られたという気持ちが兄弟を暴力にエスカレートさせてしまったようだ。勿論、兄弟は母親を死なせるつもりはなかったのだけれど、母親の体は弱りきっていたようだ。地域の人達も一家の事情を知っていて「止められずに残念だ」「何故本気でかかわれなかったのか」と、事件後後悔や自責の言葉が漏れたという。「でも、どうこうしろとか言える立場じゃないですから」という声も強かった。他人の家を覗き見るような行為は恥ずべき事とされていたし、夫婦間の事ともなると“夫婦喧嘩は犬も食わぬ”式で放って置かれた。

社会評論家の芦沢俊介氏は、この事件を見る限り「関係の貧困」と言うと言っている。一家に誰も手を差し伸べなかったのか。一家は誰にも助けを求めなかったのか。相談できる友人や親類はいなかったのか。結果的に誰も救えなかった。

人間は制度の中ではなく、人間関係の中で生きていると言う事を実感させられる事件であり、豊かな現代の貧困と言える芦沢氏は言っておられる。

このような事件と似ているケースがまたあったら、今度は救う事ができるのかの問いに行政も学校も「とても難しい」と言っている。

我が国では江戸時代に防火や防災のために5人組みの制度を作り、戦時中は隣組といった組織を作った。それは緊急の事故等に対応するための知恵から出た発想だったのだけれど、人間は自分の事以外の煩わしい事件には係わりたくないと思うもので、現在の豊かさは「関係の貧困」というコミュニティの中で、人との疎外感を助長させ、歪みを大きくしている。住む人が全て貧しく、助け合わなければ生きてゆけな



かった時代の下町の人情などは霧消してしまい、狭いアパートの中で他人に煩わされず生活することを良しとする。

先にも述べたが上位下達の上から下への命令という関係は生きているが、下から上への意向を汲み取るシステムは出来上がっていない。

ネット社会にどう対処するか

今やIT(情報技術)革命と呼ばれ、情報通信関連企業への投資は増加し、関連ベンチャー企業も勢い付いている。我が国でのインターネット利用者も1000万人と言われ、携帯電話や家庭のテレビでもインターネットに接続できるようになった。銀行預金の引き出しや買い物の決済を瞬時にするシステムとか株式の情報や売買までもがインターネットでできるようになった。インターネットは列車が本線が支線へと継がるように広がり、世界の情報、文学、音声、動画も携帯電話で見聞きできる時代になった。まさにマルチメディアの時代は到来している。このネットは益々拡大するだろうし、世の中の仕組みを情報通信システムに合わせなければ生きてゆけないとさえ言われている。

ところが、このインターネットは誰のために、どのような利益をもたらすかと考えると、ビジネスには誠に有利に思える。世界の趣向や需要といった情報だとか、世界経済の動向までも知り得ることで経済活動は益々スピードアップし適確な利益に結びつくだろう。先日テレビで報じられていた

が、工業新製品から出版といった分野までの市場の需要とか好き嫌いなどの情報を、インターネットを通じてリサーチする商売まででできた。まさに「インターネット万歳」と言いたい懸念される部分も見えてきた。先日の「教育サミット」(東京・沖縄で開催)での主要国教育担当閣僚の発言がある。急速な情報通信技術の進展と教育に対し、どう対処すべきかというテーマだ。日本でも小中学校でのインターネット導入が報じられ、乗り遅れまいと文部省も懸命だが、はたして今の情報化が人々の幸せに繋がるのだろうかという疑念だ。

人間はコンピュータという機械と向かい合い、情報のキャッチに熱中すると、外部に広がるインターネットの特性に反し、インターネット・オタクになって、自室にこもりがちになる傾向が指摘されている。まさに先日の「関係の貧乏」を助長する事になりかねない。

我が国でインターネット時代に遅れている組織と言えば、政界と行政分野のような気がする。明治時代からの長い伝統と慣習の中で新しい情報通信に合わせたシステム作りなど到底考えられないような気がする。上下の絆でがんじがらめに固められた組織は、おいそれと崩れそうにない。行政改革という思い切った改革も近いが確かに縦の絆だけでなく、横の関係も組み入れようとする発想は大いに歓迎すべきだが、縄張りを崩すことは容易ではあるまい。まして、人の罪を暴く警察官が逆に暴かれる立場ともなると、あらぬ限り抵抗し表面に現れない手段を採るだろう。最近の警察による不祥事の原因はほとんどがこれだった。

人を暴く事が天職と考えている者が、他人に暴かれるとなると、その誇りや自尊心はバラバラになるだろう。情報公開が叫ばれていても、暴く側の弱みは何としても隠したいと思うのは人情だ。しかし、だからといってそのまま放置したのでは誰のための警察なのかわからなくなってしまふ。警察権は一種の権力だから、それを行使する優越感はあるだろうが、むやみに権力を振り回されたのでは、戦時中の軍隊と同じになってしまう。だから情報通信という新しいシステムに対応できる組織が必要に思える。

政治という世界もそうだ。密室で政治に対する批判はあるが、派閥政治では密室でヒソヒソ話をするのが、政治家になった実感として身体が震えるような満足感があるのかもしれない。だが、情報化時代に対する逆行であるのは間違いのない事実だ。

役人には法律と政令、通達といった多くの文章が作成される。この文書がないと役人は動けない。しかし、この法律や政令、通達を読むと、役人の言い逃れのための逃げ道作りのように思える。それに当てはまらなければ、我々が行動したり判断したりする問題ではないと逃げを打てば良い。先の中学生の事件なども、もう一步踏み込みが足りなかったために起き、大きくなった

事件だ。行政官や公立学校の教師というのは、公務員であり責任の何であるかを、立場を考えて行動してもらいたい。教師は子供に知識を植え付けるものでなく、知識を吸収できる人間に成長させるのが教育ではないのだろうか。

現代は脳生理学が飛躍的に進み、頭の悪い要因も解り頭脳明晰な頭にするのも可能だと言われている。ところで、LD(学習障害)というのがあるが、知的発達に遅れはないが、読み書きなどの一部学習につまづくことが多いとされている。アインシュタインやエジソンもそうだったと見られているようで、さして心配もないのだそうだが、情報不足などで両親の対応に適切な助言や指導に困惑する事があるらしい。これが病気ならば治療が必要だろうが、学力や社会性を身につけるのは十分可能だとされている。昔ならば「おまえは頭が悪いからだ」と決め付けられたのだろうが、幸い世の中は進歩し、科学のメスも色々な分野に及んでいる。

これからの世の中で、情報が人間の幸せにどう結び付いて行くのかを、今一度考える必要があるように思える。利便性の追求は、大きな落とし穴を見えなくすることも有り得る。

